

《茨城のコロナの状況と交流》

令和3年度は、感染者が増えた夏に、県独自の緊急事態宣言（8月6日）が発令され、続けて政府からの緊急事態宣言（8月20日～9月30日）も発令されたため、その間は交流活動をすることもできず、より緊張した中での保育となりました。それでも、昨年度よりは一歩踏み込んで、取り組み方を工夫し、感染症対策をとりながら交流活動（わらびとり、川のぼり、山登り、登山合宿、交流リズム、文化鑑賞、職員研修等）をしてきました。子どもも職員も交流することで刺激を受け、更に意欲的になり、改めて交流の大切さを感じました。



みかん狩り

那須甲子登山



《各園の取り組み》

あおぞら保育園

夏祭り、運動会等の行事は昨年同様規模を縮小して取り組んでいるところである。その中でも、昨年ではできなかったが今年取り組んだことは、運動会のオープニング「年長保護者による豊年太鼓」である。集まっの練習は極力せず、自主練習すればできるのではないかと考え提案すると、全家庭が快く参加してくれ、実施することができた。保育園での練習は10月に入っの2日間のみ、それも密を避けるため時間を分けての練習。全員で合わせたのは、運動会前日のリハーサルだけ。当日は20名全員の気持ちが一つになり、会場中が感動的な響きに包まれた。毎日コツコツと取り組む保護者を間近で見ていた年長児は、自分たちの運動会に向かう姿勢と重なり、親子で達成感、満足感を味わう運動会となった。

つくしんぼ保育園

今年こそはと思った夏祭りだったが、日立市内のコロナ感染者の増加に伴い、保護者も参加せず平日の2日間の園内行事として取り組んだ。1日目は年長父たちが作った“ねぶた”をお披露目。子どもたちは目を輝かせて口々に「すごい!」「すてき!」と大興奮。ねぶたの周りで盆踊り等を楽しみ、昼食は夏祭りの屋台メニューにし、手作りの財布と、紙のお金で買い物した。2日目は魚釣りなどの出店ごっこなどを楽しんだ。今までならいつもやっているからと行う行事を、コロナ禍でなぜやるのか、子どもにとって何が大切なのか職員会議でもたくさん話し合い行事の在り方をみんなで確認できた事で次に繋がる取り組みになった。

はなのわ保育園

今年もコロナ感染者増加ということもあり、親父の会作成のねぶたも中止。2年連続の園内でのおまつりとなりました。しかしねぶたの代わりに年長さんがちょうちんと灯ろうを作り、園内のホールや入口正面に飾り、夕方に灯りをともし、まつりを盛り上げてくれました。運動会は参加者を制限して行われました。声援ではなく拍手という応援の形でしたが、年長の晴れ舞台とばかり頑張る姿に職員、保護者は皆感動しました。後日未満児を中心とした運動会ごっこもおこない本番さながらに元気に走る子どもたちでした。

また、未満児の保護者にもぜひ、はなのわの運動会を見てもらえる様DVD作成をしました。

たんぼぼ保育園

今年の夏祭りは去年と同じ様な取り組みとなりました。平日の金曜日となり、子ども達は各クラスの出し物や出店を年長が開き下のクラスの子達を楽しませる形となりました。（前半は年長クラスでたっぷり遊んだ）夕方になると年長だけは築山で豊年太鼓を叩き自分達の作った提灯に灯が灯ると喜び合った。そして、花火を親子で楽しんだ夏祭りとなった。

運動会は、父母の方々の迅速な対応や行動により、予定していたプログラムが早く終わり、その余った時間を即座に変えて、親子で遊べる競技にし、コロナ禍の中でもこれこそが、たんぼぼ保育園だ！といえるうんどうかいとなった。年長お泊り保育にしても、新たな開拓を求めて、予定より一つ増やして取り組んでいます。

野いちご保育園

野いちご保育園では保護者の理解や協力のもと、コロナ対策を万全にとりながら、夏祭り、運動会、交流合宿等、取り組んできました。参加人数を制限したり、時間を短縮したりと今までのようにはできませんでしたが、子どもたちにとっては大切な行事なので一人ひとりが主人公となって輝けるよう工夫をしながらの保育となりました。緊急事態宣言が解除になってからは県を超えての合宿にも参加しました。雄大な大自然の山々に囲まれての合宿生活は、大人も子どももコロナの規制のある毎日から離れ、心も体も洗われるようでした。そして子どもにとって何が大切なのか、コロナ禍の中でどんな工夫が必要なのか、保育を振り返るよい機会となりました。

ひばり保育園

夏祭りは園内行事として、子どもたちだけでの行事になってしまいました。運動会は年齢を分けて人数を制限し、室内で行いましたが大人たちに見守られながらどの子も楽しんで参加できました。

年長児は園外保育に出掛けたり、お泊りはできませんでしたが、日帰りで交流園と山登りをしました。3, 4歳児もバスに乗って公園や山登りなど園外保育に出掛けました。子どもたちは季節ごとに様々な姿を見せてくれる景色に、「遠くの山が見える」「前に来た時と違ってる」「いろんな色の葉っぱがあるね」などと発見を楽しんでいます。

そとの保育園

昨年に引き続き夕涼み会、運動会は縮小で行われました。短い時間ではあったものの、夕涼み会では年長が手作り神輿を担ぎ、盆踊りは園全体で楽しみました。運動会では参加した幼児全員が精一杯の力を出し、見学者を感動させてくれました。秋になってコロナが落ち着いてからは、年長児のみ自園に泊まり夕食、朝食を作り、クラスの仲間で食卓を囲む経験をしました。次の日には夏の気配が残る朝日峠にのぼり、普段見られない景色から自然の雄大さを感じたようです。

まつぼっくり保育園

感染拡大状況が落ち着いた10月、これからの行事を職員で改めて考え、保護者の理解も得て、バスを使っの散歩など今までできなかったことを計画しました。年長は保育園合宿・山登り・柿やみかん狩り・動物園遠足など予定し、一つ一つ行うことができて嬉しい今日です。運動会は乳児幼児に分けての取り組みで、どのクラスも目標に向かい頑張る姿があり、成長した姿を保護者と喜び合いました。年長交流を2回参加することができて、他園から沢山の刺激をもらい、もっと素敵になりたいと自分の目標をもって頑張る姿の年長の子どもたちです。

《年齢別部会》

年齢部会を7月と11月の2回リモートで昼の時間に行いました。7月は初めてのリモート部会で戸惑いながら報告書や絵を事前におくり、あらかじめ質問を出し、リモートの場で答えながら実践報告しました。決められた時間での発表となり、不十分さはありませんでしたが他園の実践を知る事で学ぶことが出来ました。11月はコロナが落ち着いてきたのですが、会場問題もあり80人近い人たちが集まるのはまだ自粛しようと、再びリモートで行ないました。また昼の時間にすることで、今まで出られなかった短時間勤務の職員たちも参加でき、学び合える利点もありました。7月の部会で決めた年齢別のテーマにそって、保育士の働きかけや子どもたちの成長発達を学び合いました。報告書を各園に送りそれを読んで質問を送り、さらに答えを送り合う。手間はかかるけれどリモート本番は時間もとれ、深めることが出来ました。また、報告時に画面上に保育の写真が写るように工夫して保育が見える形にしたことで、リモートだけどより学び合える部会が出来ました。

交流リズム 今年は会場を借り、8園を半分に分けて保育園の組み合わせを変えながら2日間での交流を行っていくことができました。緊急事態宣言中は中止になったものの、11月に再び交流ができた時は子どもたちの笑顔を見てほっとしました。運動会を経験し、どの子も数カ月前よりも自信に満ちてリズムに取り組む姿を見て、どんな状況の中でも子どもの持つ力のすばらしさを実感しました。「今度はどこの保育園と一緒にリズムするのかな」と楽しみにしている子どもたち、卒園前には8園がそろってできるように大人たちで案を出し合っています。



赤城山・交流合宿

※ 参加保育園～野いちご保育園、たんぼぼ保育園、はなのわ保育園

緊急事態宣言が解除になっても宿泊施設の人数制限は変わらず(通常の3分の1)で各地域に分かれての交流合宿を行ってきました。山々に囲まれた自然豊かな地域での合宿は、大人も子どももコロナの規制のある毎日から離れ心も体も洗われるようでした。

特に群馬県の赤城山登山では天気にも恵まれて、とても気持ちよく歩くことができました。木々のトンネルをくぐり抜けながら「森のかくれんぼうがいるみたい」とか、頂上から見える遠くの山々の鉄塔を見つけては「ムラクが住んでいるのかなー」とホップ・ステップ・ジャンプ君のお話に繋がったり、ゴーゴーと唸るような風の音が聞こえてくると「風の又三郎が隠れているのかな」などと物語の世界に思いを馳せながら、沢山の想像力を働かせ楽しんで歩いていた子ども達でした。保護者の理解や協力を得、万全のコロナ対策を取りながら、県を越えての交流合宿ができたことを大変嬉しく思います

《自然体験》

今年はコロナの感染の様子を見ながら、自然を求めて出かけていきました。

園の地域によっては交流出来ない園もありましたが、2日に分けたり、時間差で歩いたり工夫し行いました。

日光戦場ヶ原では、男体山を背景に木々の芽吹きや高原湿地でしか見られない草花を見て歩き、木道下には例年になくたくさんのクロサンショウウオを見つけ、あちこちで「イタ!」「ココ!」と興奮気味の声が聞かれました。

2年ぶりの高萩・関根川の川のぼりでは、緑のトンネルの中、川の流れに逆らいながらも、しっかりと踏ん張り歩き、腰近くまでつかっても怖がることなく楽しそうに進んでいました。途中ツルのブランコにターザンのようにぶら下がってジャンプ!自然の中の物を見つけ、何でも遊びにになってしまう子どもたちでした。

コロナ禍であっても自然体験は子どもたちの五感を刺激し、回を重ねるごとに逞しさを育ててくれるものだと実感しました。

関根川のぼり



『スーホの白い馬～朗読・馬頭琴～演奏』

11月15日(月) 場所 日立市民会館

「スーホの白い馬～朗読」～朗読家 見澤 淑恵氏

「馬頭琴～演奏」 ～奏者 嵯峨 治彦氏

絵本の読み聞かせ・「もけらもけら」「キャベツくん」

『スーホの白い馬』朗読と馬頭琴の演奏

馬頭琴のソロ演奏・「黒い馬」と馬頭琴の演奏に合わせた乗馬体験

「ひびけ草原の歌」の演奏と合唱

11月15日(月)、新型コロナ感染状況が落ち着き、今年度初めて茨城の交流園8園が集うことができた嬉しい日であります。(交流リズムは4園ずつ行いました)

日立市民会館を貸し切り、保育園ごとに一列間をあけて座り、感染対策をしながらの鑑賞となりました。

見澤さんのお話が始まったと同時に、子どもたちも大人もお話に惹きこまれるように集中し、聞き入っていました。

読み手の伝えたい所に聞き入る姿は、どの園の子どもたちもこの時期大きく成長している姿が見られました。

馬頭琴の音色の中には場面の盛り上がりや競馬の様子、またスーホの悲しみや怒りを感じることができ、さらに惹き込まれていきました。馬頭琴の演奏に合わせての乗馬は、モンゴルの本物の映像も見ながら、雄大なモンゴルを馬で走っているようでした。耳でよく聞き手綱を引く様子も音にしっかりあっていて、心も体も本物の乗馬のように全員の体験となりました。(落馬する子がいないと嵯峨さんも感心していました。)

最後にみんなで「ひびけ草原の歌」を歌い、ホール中に子どもたちの素敵な歌声が響き合い、8園全園がこのようない文化「スーホの白い馬」を通して豊かな体験となった一日でした。

